

〈研究論文〉

上総国山辺郡の赤人伝承の背景

―現地資料の側から―

岡 田 美也子

【要旨】

本稿は、『古今集』古注釈にみられる赤人上総国山辺郡出身説の背景を、地誌や現地資料の側から考察したものである。

安川柳溪『上総国誌』は、田中村の赤人塚や法光寺の来歴を記したあと、「黒川某」の古記について述べている。その書には、人丸赤人同一異名説が記されており、永徳二年（一三八二）の款記があったという。黒川氏が永禄年中会津に在ったとの記述から、近世史料に会津黒川出身で法光寺や本福寺の開山とされる日什所縁の者であった可能性が考えられる。日什伝記には師の和歌が残っている。さらに法光寺の改宗を行ったとされる日泰と酒井定隆の近くに古今伝授の世界があった。十五世紀の山辺郡で古今集古注釈の書写が行われていたことを示す資料もあり、そうした環境があったことがうかがえる。

赤人山辺郡出身説、人丸赤人一人異名説について考えるとき、十

三世紀以降の山辺郡における日蓮宗の動向とその周辺も視野に入る必要があると考える。

キーワード

人丸赤人、上総国山辺郡、自性論、日蓮宗、古今集古注釈

一 はじめに

関東歌壇やその背景については、かなりの研究が進んでおり、房総についても戦国歌壇や房総史のなかで解明されてきたことがある。ただし、現存の資料は決して多くないため、未開拓の視点があると思われる。

前稿¹では、為顕流古今集古注釈のなかの赤人上総国山辺郡出身説を中心に、その発生の背景と時期を考察した。そのなかで山辺

郡には、歌人としての事績のある北条長時や久時が建てたとされる城や寺院が存すること、長時建立の浄光明寺に領地が寄進された十四世紀の資料が残っていることから、少なくとも弘安年間をさほど下らない時期に赤人上総国山辺郡出身説が一部歌人で知られるようになったのではないかと考えた。

一方、現地において赤人の伝説は、赤人塚、またそれに程近い法光寺と同寺蔵の赤人像にまつわるものとされている。

東金市田中宇閭魔堂（旧上総国山辺郡大和村田中）の赤人塚には現在、碑が残っている。二〇〇四年の実地踏査でみたところでは、側面に「文化二年丑年中及建立」、背面に「東都行柳（カ）／兌堂／方堂／冬英」²とあった。

隣接する法光寺には、赤人の座像と閭魔像が収められているという。『東金市史』は、「像の高さは一八・一センチメートルで、楡の一本からの丸彫で彩色されている。笑を含んだその表情は、精緻な彫りの巧みさを見ることができ、今にも一首歌い出しそうな歌聖の像である。おそらく、この地に赤人伝説が起った文化年間（一八〇四～一八一七）ごろの作と考えられる。」³としているが、前稿で述べたように赤人伝説は文化年間を遡ると考えられ、造像の時期とは一致しないだろう。

また『東金市史』は、法光寺の創設について次のように述べている。

寺伝によれば、本寺はもと真言宗に属して西法寺（正源寺と言ったともいう。……）……長享二年（一四八八）五月、土気

城主酒井定隆の発した改宗令に対し、西法寺の寺僧はこれに服しなかったため、定隆の怒りを買ひ、一夜の間に堂宇は破壊され、寺僧は追放され、翌延徳元年（一四八九）二月、定隆の命によって、日泰上人が現在の地に創建したもので、宝珠山法光寺と号したといわれている。しかし、この年時については、「上総国誌」は「長享元年戊申二月十八日」としている。長享元年（一四八七）は改宗令の一年前であり、延徳元年より二年前である。早すぎる感じがしなくてもないが、ありえないことではない⁴。

確かに『上総国誌』では、宝珠山法光寺について「長享元年戊申二月十八日、開山日泰」（巻之二 郡部上 仏刹部 二二丁表）、「長享元年戊申二月、酒井越中守所^{ニシテ}建^{ツル}、而為^リ僧新日泰ノ開基」。（巻之六 村部下 東総村志 ○山辺郡 二六丁表）としている⁶。しかし、長享元年は丁未であり、『改訂房総叢書 第四輯』再録に際して「長享二年戊申」に修正されている。定隆は長享元年に土氣に入城し、翌五月十八日に東上総一帯に日蓮宗への改宗令を出したとされており、これがいわゆる七里法華と称されてきた。ただし、この改宗令については、根拠とされてきた資料に疑義も呈されており⁷、その実態は必ずしも明らかではない。

そこで、赤人塚や法光寺に関する現地資料や地誌を改めて検討し、赤人上総出身説の生成と伝播に関与した人々の姿をできるだけ探ってみたい。そして、上総国山辺郡の和歌史の舞台と捉える可能性について見ていきたい。

二 赤人塚、赤人像、法光寺に関する文献資料の記述

赤人および法光寺の創始をめぐる文字資料には、次のようなものがある。①～③が法光寺側の資料、④～⑥が地誌の類である。

①「慶安二年（一六四九）十二月十一日 新寺検地帳 法光寺蔵文書」複写（原本焼失）

②法光寺蔵「上総山辺郡田中村赤人塚縁起」「法光寺什宝産之珠縁起写」「東金市史 三 史料篇三」所収 一二二〇頁下～一二二三頁下

③筆者不明「見聞記」篠原初子家文書 安政五年（一八五八）『東金市史 五 総集篇』所収 五九四頁

④中村国香『房総志料 卷三』宝暦十一年（一七六一）年頃の旅の記録 『改訂房総叢書 第四輯』所収 四六頁、五六～五七頁

⑤田丸建良編・立野良道評注『房総志料続編 卷之六』天保四年（一八三三）序 『改訂房総叢書 第四輯』所収 一九五～一九六頁

⑥安川柳溪『上総国誌』明治十一年（一八七八）序 『改訂房総叢書 第四輯』所収 三六五～三六六頁

②は、明治七年（一八七四）に書かれた柳溪「南総各地見聞筆記」に記録されたものである。「上総山辺郡田中村赤人塚縁起」と「法光寺什宝産之珠縁起写」の間に享保十四年（一七二九）七月九日の知行所からの口上書が記されている。

「上総山辺郡田中村赤人塚縁起」は、前半部分に古今集序を引用

しつつ、「飛鳥井古今抄」に赤人が「上総国山辺郡人也、於彼所在廟所也」とあることに触れている。また、縁起の結びには「若シ有ラバ下志スニ国学和歌ニ者上、仰イデ可シニ拝覽ス。其感応実神妙不レ測也」とあり、赤人像が和歌を志す者の間で信仰の対象となっていたことがうかがえる。

法光寺蔵「上総山辺郡田中村赤人塚縁起」

宝珠山法光寺蔵

抑所^ノ奉^ル安^ニ置^シ于^ニ当^ニ山^ニ赤人尊像者、尋^ニ其由来^一、神龜天平年中ノ人而、長^ニ国学^一、秀^ニ和歌^一、世称^ニ歌仙^一、尤与^ニ人磨^一同時此名也。故貫^ニ之古今序^一云、人丸者難^レ立^ニ赤人之上^一、赤人者難^レ立^ニ人丸之下^一。然、尋^レ謂^ニ何国人^一、飛鳥井家古今抄云（フ）、上総国山辺郡人也。於^ニ彼所^一在^ニ廟^一矣。即從^ニ当^一山南往^ニ二町余步^一、於^ニ田中^一在^ニ丘壠^一、是即歌仙赤人廟所也。從^ニ公所^一賜^ニ助祭田地^一於^ニ当^一山累代関^ニ係此事^一矣。赤人尊像者、從^ニ往古^一至^ニ今数代奉^レ安^ニ置^シ于^ニ当^一寺^一者也。若有^ニ下志^一国学和歌^ニ者上、仰^ニ可^一ニ拝覽^一。其感応実神妙不^レ測也。為^ニ後來^一記^ニ其趣^一如^ニ斯云^一爾。以上所^レ書法光寺僧侶之乎、雖^ニ曖昧拙人^一姑^ニ記^一具^ニ後考^一。

田中村名主組頭ヨリ呈上書写。

「法光寺什宝産之珠縁起写」は、法光寺に伝わる宝珠に関する伝説である。「当山開基」戒定房日行聖人は、市原郡八幡郷出身で幼い頃から円頓房日泰聖師に師事し、智行兼備、天台の教えと日蓮宗

の要義に通じており、多くの法華霊場を建てた。「当山」はその一つである。また、かつて渋谷村干ばつの折に祈りによって雨を降らせたことから、その地に雨請山行光寺（現茂原市渋谷）が開かれた。また誦経の際には「当山」の清水に蓮が流れ来た。縁起は「聖人ノ高德」に感じた「竜蛇之所_レ致」としている。そして、「産王」（玉力）の逸話が続く。隣村福俵の本福寺は、日行の閑居の霊場であった。大雪の日、本福寺と「当寺」往復の途上、女と会い、赤子を抱いて欲しいと頼まれるが、その子は石のように重く、雪のように冷たかった。日行は、赤子を抱いたまま女の抜苦与楽を願って誦経し、それによって罪障から逃れた女は、日行に宝珠を献じて赤子を抱いて消え去った。この玉は、「当山」の所持するところとなった。この宝珠には、消火、安産、降雨、晴天などの願いを叶える力があつたという。日行の法力を称揚する逸話であるが、水・竜蛇と玉といった水神信仰を思わせる要素と、いわゆる雪女の話が結びついたものであり、話そのものとしても興味深い。

法光寺の開山は『上総国誌』はじめ複数の資料において日泰とされているが、縁起では日行を「当山」すなわち法光寺の開基としたうえで、日行が日泰に師事したと述べている。長源院日行は、京都妙満寺第二十三世住持で、生年未詳、没年は永禄九年（一五六六）十二月二十二日であるので¹⁰、『東金市史』所収の「法光寺什宝産之珠縁起」に「永徳九年」（一三八九）とあるのは「永禄」の誤りである。縁起によれば、雨請山行光寺（現茂原市渋谷）¹¹ および長栄山本福寺（現東金市福俵）の開基というが、前者は市原草刈の法

音山行光寺との混同かとも思われる。注意は必要だが、少なくとも近世前期に日行は、法光寺と本福寺の開山ないしそれに準じる存在と位置づけられていたらしい。

③「見聞記」の法光寺関連記事は、三つの項目に分かれており、第一項は領域と所有者に関するもの、第二項は発掘された遺物に関するもの、第三項は法光寺の来歴に関するものである。このうち第一項と第三項の関係箇所を左に引用する。

○田中村法光寺境内の儀は、日泰上人御開基にて、長享元年末年御建立。同村黒川美濃守の子兵部、後に彦三郎と称す。同人屋敷地の内、四反四畝十八歩、右代地同村井戸川筋上畠にて渡る。酒井越中守清伝入道と号す。右領主なり。……（後略）

○田中村宝珠山法光寺、元真言宗正源寺と云ふ。日行聖師にて改め日蓮宗と相成り、泰師御開基とは相成り居るなり。……（後略）¹²

第一項と第三項はいくつか異なる箇所がある。第一項は、開基は日泰で長享元年に建立されたという。「酒井越中守清伝入道」定隆の名もみえるため、いわゆる七里法華に先立つ事柄と読める。一方、第三項は、日行の時に日蓮宗に改宗し、日泰開基となされた、と読める。そのことは「法光寺什宝産之珠縁起」と通ずる。

さらに、これと関連の深い資料が①「慶安二年十二月十一日 新

寺検地帳」(法光寺蔵文書、原本焼失)である。筆者が二〇〇五年
度城西国際大学日本研究センター主催の公開講座でこのテーマを
取り上げた際、後日、東金市の飯高和夫氏より関係資料としてこの
写しを賜ったものである。本資料では宗祖日蓮以下、開山について
次のように記している。

弘安五年壬午十月辰剋

日蓮大菩薩

入成六十卷才

貞應元年壬午二月十六日也

元祖御誕生

佛成二千二百七十一年

明德三年壬午二月廿八日七十九才

開山二位
僧都日什聖師

奥會津ニテ御入寂也

関東上總國土気庄

田中村新寺

寶珠山法光寺

堤之内未曾有

本堂大曼荼羅也

(破損) 年戊申二月九日

元祖日泰上人判

並永録九年寅十二月廿二日

後ろから三行目の破損箇所は、日泰在世前後の「戊申」の年、す
なわち長享二年であろう。別の箇所にも「長享二年戊申二月八日夜
一夜之内土気城主酒井越中守様庄仰渡古寺西法寺引拂」と記されて
いる。

ただし、この検地帳では開山は日什とされており、日泰は曼荼羅
の判に「元祖」と記されている。宗祖の日蓮が「元祖」と称されて
いることを考え合わせると、日泰は法光寺の「曼荼羅」本尊信仰の
祖という意味であろうか。複写文書の末尾「永録九年寅十二月廿二
日」は日行の没年月日であるから、この後に日行の名が続いている
のだろう。この記述は、②「法光寺什宝産之珠縁起写」や③の第三
項における日行の位置づけと合致するようである。

日泰日行の師弟と改宗時の問題は、法光寺末寺の本福寺にも存し
ている。享和二年(一八〇二)年「福俵明細帳」によれば、本福寺
は永禄三年、開山 日什上人 開基 日行上人とされている。

『東金市史 五 総集篇』¹³は、同寺開基の二説、永禄三年と、永
禄九年(『上総国誌』による)について考証を行ったうえで、いず
れにせよ定隆の改宗令を長享二年とすると、約七十年以上も後のこ
とになることに疑問を呈しているが、この辺り一帯の改宗は、定隆
と日泰の前後に時間の幅を持つて行われたと考えるべきで¹⁴、本福
寺については日行が主となったことを意味しているのではないか。

併せて、法光寺と本福寺の開山が日什上人とされていることから、近世において両寺が日什門流であることが強く意識されていたことがわかる。

次に、『改訂房総叢書』に収載された地誌類から法光寺と赤人に関する記述を概観する。

⑤『房総志料続編』と⑥『上総国誌』は、④『房総志料』の赤人塚および法光寺の記事を参照している¹⁵。内容の出入りや若干の異同があるが、『上総国誌』を適宜分割して概略をまとめる。

ア、長享二年戊申二月、酒井越中守の建立、日泰が開基となる。往昔、真言宗で西法寺と称す。いまは桜井某の宅地である。

イ、寺宝に「産之玉」あり（其縁起ノ略ニ曰ク、当山二世大僧都日行ハ」として法光寺什宝産之珠縁起」の内容を記している。略す）。

ウ、田中村に古跡あり。伝によれば山辺赤人出生地という。法光寺から南に二〇〇歩。（中略）或る人が小碑を立てて「赤人塚」と刻む。法光寺に赤人縁起あり。行文疎拙、証するに足らず。

中村国香曰く、寛文年間に、地元の人によって木像一体が掘り出されたが、朽ちており不完全なものであった。俗工が作成した摸像（閻魔像という）と共に併置された。元禄の頃、佐倉近辺から天台僧が来訪し、これは閻魔像であるから日蓮宗には無益なものととして一体を持ち去った。これがおそらく赤人像であったのだろう。享保年中、幕命による内覧あり。以上、房総志料。

いまその場所を確認すると、閻魔の古像がある。款があり、文明

十五年四月、□経の結衆がこれを再興したと。数字が消磨し、僅かに読める。また、その左に、文化九年八月吉日、日聴の記あり。又、赤人塚近辺に閻魔堂と地名あり。これらより、その像は文明年間閻魔堂に安置されており、後、長享の改宗の折に地中に埋められ、落剥が激しくなったものだろう。文化九年に再興され、款が録されたと考えられる。決して文化に再び刻まれたものではない。なおかつ赤人の模像でもない。思うに、その像は久しく埋められていたために面貌が不分明となったところ、出土の際、近くに赤人塚があったために、赤人像とされたとして不思議はない。前出の説は、中村翁当時の伝聞の誤りである。ここに訂正する。

エ、また、本村に、黒川某という者あり。その先祖は黒川弥次郎次綱といい、鎌倉武鑑にみえる。永禄年間、田中刑部と称して会津にあったが、後に黒川氏に復した。いま同氏の古記を見るに、柿本人麿は一人二名である。天武天皇三年八月三日、石見国山野村に生まれ、持統・文武両朝に仕え、石見守に任ぜられた。罪有つて上総国山辺郡田中村に配流となった。聖武朝、万葉集撰集の時、赦免されて、位階を改め「正三位宰相山辺赤人」と改名した。よって、人麿と同人異名である。孝謙天皇委天平宝字元年、八十四歳にて卒去す。款に曰く、「永徳二年壬戌七月日 田中村西法寺」と。

按ずるに、紀貫之の古今集序に人丸赤人の歌格を評しているので、両名は別人である。そのほか諸書に一人二名説はかつて所見になく不審である。ただ、永徳二年は今からおよそ四百九十年前の古記であるから拠り所があるのだろう。後考を俟つ。改めて考えるに、一

古記に曰く、山辺赤人は上総国山野辺の出身であると。また、飛鳥井古今抄に曰く、「赤人ハ上総国山辺郡ノ人也。彼所ニ於テ廟有リ」云々と。そうであれば、本郡にて生まれたということは保証できるか。（後略）

アといは、法光寺の創建あるいは改宗に関する記述で、法光寺側の資料で日泰開基という点に揺れがあったこと以外、大きく隔たりはない。

ウは、赤人像に関することである。柳溪は、改宗前も後も像は赤人像ではなく閻魔像ないしそれに類する像と考えているようである。先に像を見た中村国香も「全く赤人の像などをいふべきものにはあらず……却って閻魔の相に似たるなるべし」（『房総志料』）としている。佐倉に持ち去られたのが赤人像であったか否か知るすべがないが、少なくとも法光寺に現存する赤人像は、国香や柳溪のいう像とは別ものということになる。

エは、⑥に独自の記事であり、黒川氏の「古記」に人丸赤人一人二名説があったことについての考証である。款を信じるならば、法光寺以前にこの地に人丸赤人一人二名説が伝わっていたということになり、極めて興味深い。黒川の名は、①②にも見えた。

これらの、赤人塚及び赤人像、法光寺に関する中世の事蹟を時系列に示しておく。

永徳二年（一三八二）七月

黒川氏古記に柿本人麿一人二名説あり。款に「永徳二年七月壬戌七月日」。（↓永録年中）

明徳三年（一三九二）二月二十八日

日什没

文明十五年（一四八四）四月

□経の結衆が土中から掘り出された閻魔と思われる像を再興。

長享二年（一四八八）二月、元年説もあり。

酒井越中守が土氣入城、二月、真言宗の西法寺を引き払った。

日蓮宗法光寺を建立（前身は正源寺とも）。

永正三年（一五〇六）一月十九日

日泰没。

大永二年（一五二二）四月二十四日

酒井越中守定隆没

永禄年中（一五五八〜一五七〇）

田中村黒川某の祖「黒川弥次郎次綱」は田中刑部と称して会津に在った。

永禄九年（一五六六）十二月二十二日

日行没。

以上から、赤人山辺郡出身説、人丸赤人一人二名説に何等かの形でかわった人々として、「黒川氏」、日蓮宗派日什門流（日什、日泰、日行）などが浮かび上がってくる。

三 黒川氏

まず改めて『上総国誌』の黒川氏の「古記」に関する本文を引用する。

又、本村有^ニ黒川某者^一。其先称^{ハス}黒川弥次郎次綱^ト。食禄一万八千町。^{武鑑中}自^ニ永禄中^一称^シ田中刑部^ト、在^リ会津^ニ。後復^ス黒川氏^ニ云。今閱^ニ、同氏古記^一、曰、柿本人麿者、一人二名也。天武天皇三年八月二日、生^ル於石見国山野村^ニ。後仕^ヘ持統・文武両朝^ニ、任^ズ石見守^ニ。有^レ罪流^ニ上総国山辺郡田中村^ニ。聖武帝朝、橘諸兄・大伴家持撰^ニ万葉集^一時、有^リ官免^一。改^メ位階^ヲ、且改^ス名正三位宰相山辺赤人^ト。因与^ニ柿本人麿^一同人異名也耳。孝謙天皇天平宝字元年、春秋八十四歳而卒去。歿日、永徳二年壬戌七月日、田中村西法寺。^{捺印。挿入原文。}按、於^ニ紀貫之古今集之序^一、評^ス人麿・赤人歌格^一也、已為^ニ別人^一、其他於^ニ諸書^一亦一人二名之説曾無^レ所見^一。恠矣哉。雖然、永徳二年距^ニ今凡四百九十余年之古記、焉可^レ無^レ所^レ拠耶。尚俟^ニ後考^一。再按、一古記曰、山邊赤人者、総国山野辺之産也。又、飛鳥井家古今抄云、赤人者上総国山辺郡人也。於^ニ彼所^一有^レ廟。云々。然則謂^ニ生^ル於本郡^一者、略^ル可^レ証乎。唯、憾^ム遼古草昧之国、文筆不^レ伝焉。口碑所^レ遺、尺地所^レ存、或不^ニ其所^一居、則為^ニ出生之地^一亦不^レ可^レ知也。

記された内容は簡潔だが、黒川氏の古記の内容は、古今集古注釈のうちに為頭流とされる書に載る自性論に近似し、同系統の説ということが出来る。その比較的早いとみなされているものに三輪正胤蔵『柿本人麿之事』と『金玉双義』がある。「古記」は、人丸が持統・文武両朝に仕えたとする点、罪の中身に触れていない点は前者に近いが、『万葉集』撰集に伴って罪を免ぜられて都に召し返されたと述べる点は後者に近い。左に『柿本人麿之事』当該箇所を引用する。

自性論灌頂卷ニ、人麻呂者、天武天皇御宇、三年八月三日、石見国都田郡山野ト云里ノ民家ノ後裔、柿本ノ下ニ出現セシ化人也。其歳廿余バカリ、家主尋問、答云、我ニ父母ナシ、兄弟ナシ、来ル所モナシ。知芸モナシ、唯和歌ノ道ノミ知ルニタエタリト。家主スナハチ、丹後ノ国司、秦ノ冬道ニ申ス。冬道、清見原天皇奏。帝悦思食テ、召上テ哥道ノ御師範トス。是哥ヲ詠スルコト、流水ノ速ナルカ如ク、風花ニツケテ自在也。時ニ任^シ、石見權守^ニ、始賜^テ姓、号^ニ柿本人丸^一。次年三月一日、補^ニ任播磨守^一、持統天皇サマデ哥道、賞シタマハズ。文武天皇別而、御賞翫シタマヒ、其道優美也トテ、則御師範トシテ、大夫号授ケ、出頭甚キニヨリ、以下四位不^レ経而、正三位ニ加階スト云々。或ハ云、仕^ヘ聖武帝^ニ、孝謙天皇賞セラレテ、正二位内大臣ト贈官セシムト。亦、平城天皇ノ大同二年八月十一日贈官トモイヘリ。

(中略)

自性論ニ云。或問、人丸者赤人「カ」難^ク立^シシト上^ニ 赤人者人

丸〔カ〕難^ク立^シコト^下ニ。雖^レ然、古今集ノ中ニ、人丸歌ハ多シ。何ゾ赤人ノ歌、一首モ不^レ入事如何。答云、人麻呂、赤人者、一駄二名也。故ニ一人二名不^レ可^レ入。亦問、一人二名ト云事、有^ルニ何ノ本証一哉。云、人丸有^テ事而、靈龜年中ニ上総国山辺郡ニ配流〔ナリ〕。聖武朝ニ召返〔カヘサル〕時、改姓名、山辺宿祢赤人ト号。然則一駄二名也。此例異国本朝共ニ多シ。貫之為^レ蹟此深義、二名ヲ^ラ挙而、入一人、自余ノ集ニ入〔ル〕人丸赤人ノ事、以前後各入故也。是秘中之秘、千金莫^レ伝ト云々¹⁷。

『上総国誌』には「飛鳥井古今抄」の書名も見えるが、『房総志料』同様、『古今榮雅抄』¹⁸を参照したものであろう。しかし、同書は赤人を上総国山辺出身とし、現地に廟があつたことを記すものの、人丸の配流、赦免に伴う赤人への改名といった人丸一人二名説には触れていないことから、あくまで考証のために引用されたもので、黒川氏の古記は別系統であろう。

赤人の官位分明に注たるものみえず。上総国山辺郡の人なり。彼所に廟今あり。旅客歌をかき付ると也。彼所にさゝ栗とて。長一尺ばかりあるに、栗のなると。かの国の住人物がたりあれば、今書付る所なり¹⁹。

さて、『上総国誌』は、「黒川某」の祖「黒川弥次郎次綱」の名が『鎌倉武鑑』中に見えることと、「次綱」が永禄（一五五八）一五七

○より「田中刑部」と称して会津にいたが、後に黒川に復したことを記している。黒川姓は、『鎌倉武鑑』には見いだせない。一方、前章に挙げた③「見聞記」には「黒川美濃守の子兵部、後に彦三郎と称」した者が見え、さらに、①慶安二年の検地帳にも複数個所に「黒川」姓の人物名が記載されていることから、江戸初期には田中村に「黒川氏」が住していたことが確認できる。

・上田中村

殿内

黒川刑部

・新寺

本地主美作守

子兵部

孫彦三郎

後リ播磨

等

・利山院日生眼藏大和尚

俗名 田中兵部

孫 彦三郎

・（大檀那のうち）

田中村号

黒川刑部（虫損）光

同 子彦（虫損）衛門光忠

同 三郎佐衛門忠玄（力）

・（裏表紙に）上総国山辺郡

上田中村殿内

黒川彦左衛門

記載された人物の相互関係は明らかにしがたいが、仮に「孫彦三郎」を当代の人物とし、慶安二年時点で六十歳とするならば、二代遡って「利山院日生眼藏大和尚 俗名 田中兵部」が永禄年中に存命であった可能性はある。黒川が田中と名乗っていた時と考えることが可能であろう。

では、遡ること約一八〇年、永徳二年七月の款を持つ古記を所有していた黒川氏とは、どのような存在であったか。それを考える時、黒川「次綱」が一時住んだという会津には黒川郷があり、日什が同地の出身であったことが注目される。

日什²⁰は、正和三年（一一三二）に陸奥国黒川で、石堂太郎覚知と蘆名四郎盛宗娘である清玉姫との間に生まれた。両親の死後、元弘三〇正慶二年（一一三三）に叡山に上り、慈遍のもとで出家して玄妙と称し、正平七〇文和元年（一一五二）には延暦寺の学頭となった。文中元〇応安五年（一一七二）、叔父蘆名直盛に招かれ、羽黒山東光寺の住持となる。しかし、六十半ばで日蓮の遺文『開目鈔』

に触れて日蓮宗に改宗し、天授六〇康暦二年（一一三八〇）に下総真間の弘法寺に帰伏したのち、法華経寺の日尊に師事して名を日什と改めたのである。弘和元〇永徳元年（一一三一）二月には千葉郷で布教を行った。その後、四月、日蓮聖人の遺命である帝都弘通、宗義天奏のため上洛。六月二十三日に二条関白良基を相手に公家奏聞第一度をなし、さらに後円融天皇と良基に立正安国を奏聞した。七月六日には、洛中弘法の論旨、二位僧都を賜った。その後、房総と京、また故郷の会津を歩き来して布教に努めた。その間、元中二〇至徳二年（一一三五）遠江府中に玄妙寺、元中六〇康応元年（一一三八九）京都室町に妙満寺、元中八〇明徳二年（一一三九二）会津に妙法寺を建立し、これらが什門三本山となった。元中九〇明徳三年（一一三九二）二月二十八日、故郷会津で没した。

第二章に述べたように、日什は、法光寺と本福寺の開山とされている。その檀那一族に名が見える田中兵部・黒川刑部は、日什所縁の者であったと考えられないだろうか。そこで、黒川氏の「古記」の人丸赤人一人異名説について考えるとき、日什と和歌の世界との関係の有無が問題になる。

日什は、上洛した永徳元年を皮切りに三度、良基への奏聞を行ったが、このことは日什と歌壇との接点として注目される。周知のように、良基は和歌を頼阿に師事し、『近來風体抄』や頼阿との共著『愚問兼注』などの歌学書を残した。この頃、古今集注釈の世界では二条家（御子左家俊成流）の説が頼阿、東常縁、宗祇へと伝えられ、古今伝授の一つの柱となっていた。

日什伝にはいくつかの和歌が伝えられている。例えば、日什の高弟であった日蓮の『門徒古事』（応永三十二年（一四二五））には、京から鎌倉に向う途上の日什の和歌として、次の一首がある。

其日足柄山ヲ御越アリ富士山ノタウゲヲ御過^峠有^テ、馬ノ上ニテ御経ヲ被^レ遊、御口ズサミニ云、

「またいそぐ駒のあしから山越て富士をばあとにかえりみるらん」²¹

その他は、近世に編まれた伝記の類に含まれているため、日什の実作か否か定かではないが、鳳凰山本漸寺の日台が編んだ『日什上人実伝』（明和九年（二七七二））には、背景に検討の余地があるものが二首ある。一首目は、弘和三〇永徳三年（一三八二）、三度目の公家奏聞ののち、室町の僧堂で詠んだとされる和歌である。

門^仁立^チ物^乞フ人^農有^{奈良波}憐^{礼登}思^{比施}
古佐須登茂

（門に立ち物乞ふ人の有ならば憐れと思へ施こさずとも）

二条藤原為重卿著「述ス新後拾遺集」撰「此ノ和歌ヲ」入^ル集^ニ。 ²²

『新後拾遺集』にこの歌が入集したという事実はない。ただ、日什と和歌、特に二条家の伝との関係を考えるうえで興味深い。

なお、本漸寺は、山辺郡松之郷同夢山願成就寺が妙満寺派に改宗し、戦国時代に東金城主酒井氏が現在地に移した。願成就寺は、北

条久時により弘安三年（一二八〇）に創建されたことから、前稿で同地と和歌の世界とのつながりをうかがわせるものとした。

もう一首は、『日什上人実伝』だけでなく、複数の伝記に引用されているもので、日什の代表的和歌と考えられてきたものである。

老^加身^波何^{久乃}野^辺仁^朽留^{登母}心^{呂波}澄^{満奴}堀^川農^水 ²³

「日殷記」に依れば日泰上人の和歌である、と日台が注しているように、永正十一（一五一四）成立の『雲玉和歌抄』に載る日泰の和歌に似ている。

日泰上人と申し、上総八幡に法華堂をたてて、又、本寺妙満寺造営のために上洛し給ひ、春の比申しおくりし
わするなよ秋は千草の浜の名をさもこそ花の宮古なりとも

下向ありてなどやおぼしけん、遷化の事祈り給ひて、彼上人
うき世とてあづまの土となりぬとも心はすまんほり河の水

かくよみおはせしが、ほどなくすぎ給ひぬ

『雲玉和歌抄』四七〇、四七一 ²⁴

「うき世とて」が日泰の和歌であることは間違いない。日泰が什門流の祖の和歌を本歌取したか、日泰の和歌を用いて日什の和歌が創作されたか。日什門流の一次資料が少ないため、ここで検討することは避けるが、日什門流と和歌の世界の近さをうかがわせる材料

として受け止めておきたい。

この章の最後に、同時期の陸奥国黒川郡のほうから房総との関係を見ておきたい。

時代を一度遡る。千葉常胤の六男胤頼は、下総国東庄、三崎郷を与えられて「東六郎大夫」と称した。東初代当主である。三崎荘は、文治元年（一一八五）年に片岡常春が没収されたあとを引き継いだもので、正治元年（一一九九）～二年に藤原定家が預所職にあったことが知られている。胤頼はこのほか、「文治ノ忠賞ニ、陸奥国黒川郡ヲタマワ」ったことが『奥相秘鑑』²⁵にみえる。胤頼の息男重胤は和歌を定家に学び、以下四代あとの常縁へとつながる。

また、相馬岡田氏三代目の胤康が、黒川郡新田村の知行を認められたことが建武二年（一三三五）三月二十五日陸奥国宣にみえる。さらに、同年十二月二十日相馬胤康讓状²⁶によって胤康から胤家へ伝領されたことがわかる。胤康は、建武三年（一三三六）四月十六日に片瀬川の戦いで戦死したが、その頃、子の胤家は奥州総大将石塔源藏人義房のもと行方郡内で奮戦していた（「相馬胤家代祐賢申状案」）。石塔は石堂とも書くため、日什の父石塔覚知と同族であった可能性がある。両者は時期的に重なる。

いずれも下総の千葉氏の陸奥国黒川との関係になるが、黒川郡から房総への人の移動の可能性があったことを示していよう。

四、酒井定隆、日泰 附・十五世紀の山辺郡と古今集古注

ここまでは黒川氏の「古記」の款を起点に、十四世紀の山辺郡田中村を見てきた。日什門流の動向の中に人丸赤人一人二名説、赤人山辺郡出身説の淵源があった可能性を示唆した。ここでは法光寺の伝に沿って「酒井越中守」の周辺を見ておきたい。

周知のとおり、上総酒井氏が東金土気一帯を治めるようになって、日蓮宗日什門流の動きが盛んになった『東金市史 六 通史篇上』第三章 戦国時代の東金 B 七里法華とその形成²⁷、『大網白里町史』第一部 郷土のあゆみ 第二章 中世 第八節 上総衆酒井氏と日蓮宗など²⁸。その画期となったのが、伝説に彩られている部分もあるが、定隆と日泰の邂逅、定隆の日泰帰依である。

定隆の出自については諸説あるが、近年は、『鎌倉大草紙』に見える内容を元とした説、すなわち享徳の乱の際、東常縁と共に関東に下向し、馬加康胤討伐に付き従った浜春利、あるいはその子とする説が有力視されている²⁹。周知のとおり、東常縁は二条家の秘説を伝え、宗祇に古今伝授を行ったことで知られる。浜春利にその方面の影響があったか不明であるが、常縁がそうした歌学の情報をもたらした可能性は否定できないだろう。定隆や日泰の周辺にも赤人上総出身説、人丸赤人一人二名説を醸成する環境があったと思われる。

ここで、日蓮宗から離れるが、同地における古今集古注釈の存在を示す資料について確認しておきたい。

井上宗雄は、「上総のような辺陬の地でも次のような事蹟を見出す事ができる」として尊経閣文庫蔵『古今集註』の奥書を引用し、次のように述べている。

尊経閣文庫蔵『古今集註』（一冊、室町末写、卷三までの注。

〔国語国文学研究史大成〕『古今集』研究史年表には為家注となる）の奥書に、

明応二二年乙卯二月廿八日書畢、上総国山辺郡於十文字村二

角田頼存ヨリ相伝畢、押日源六忠慶自筆也

明応五年丙辰五月十七日書了 登誉之

天文六年丁酉七月四日

長意「七十一才」

とあるのである³⁰。

「上総国山辺郡於十文字村」は、この奥書の明応四年（一四九五）より四十年ほど前の享徳二年（一四五三）十二月十五日「足利持氏御判御教書」に「華蔵院領同国郡名郷内十文字荒野村」と見える。「郡名郷」は現在の求名と考えられる。

華蔵院領同国郡名郷内十文字荒野村 役夫工米・国衙般若会
以下諸公事課役并守護使・郡使催促入部事 所令免除之也³¹

華蔵院は、浄光明寺の支院である。前稿でもとりあげたが、浄光明寺は、十四世紀以降数度に亘って上総国山辺郡を領地として寄進

されている。北条長時の創建になり、その孫の久時は本尊阿弥陀三尊を造立した。「浄光明寺敷地絵図」³²には久時の子守時の持仏堂や邸が描かれている。赤橋流北条氏と東金の和歌的環境生成の関連については前稿で推論を述べたとおりである。

「角田頼存」については関連資料が見当たらないが³³、「押日源六忠慶」については、Webサイト「千葉一族」が「押田」氏の項で、前掲の『古今集註』奥書を記した人物を「押日（押田）源六忠慶」³⁴としている³⁵。押田氏は、八幡太郎源義家の六男義隆を祖とし、千葉氏の側近として下総に根付き、その後、匝瑳郡八日市場城主として知られるようになった。Webサイト「千葉一族」では、応永二十年（一四一三）の寺領寄進状からこの頃には八日市場周辺に押田氏がいたことがわかるとしている。

この押田氏が菩提寺としていた円長寺関連の資料「恵光院過去帳抜書」³⁶に天文七年（一五三八）十月七日の供養として「押田 八日市場福岡城主」と、円長寺第九代「長意法印」の名があることを今回確認した。先の奥書と時代は合致する。

また、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『古今集注釈書伝本書目』³⁷には、『古今大事』の書名のもとに四冊の写本が挙げられているが、そのうち京都大学文学部閲覧室（国文）蔵、東北大学附属図書館・狩野文庫蔵の二冊には、書写者として「上総介源忠直」「祐心」の名が記されているという。また、前者によれば、文明六年（一四七四）写とのことである。冒頭、

赤人之事口伝に曰く、人丸ハ聖武天皇の後光明皇后を犯し奉て、上総国山辺と云所になかされしかとも、此人和歌の長者、肩を並る人なし、其上忝も帝の師読にめされける間、ゆるされへしとて、めしかへさるゝ也……³⁸

と始まつており、この説への関心の高さがうかがえ、この書も上総に伝来したのではないかと思わせる。

これらから、十五世紀の東上総に古今集注釈、秘説の書が伝わっていたことが確認できるのである。

五、十三世紀の東金における日蓮宗の動向

さて、前稿では、赤人と上総国山辺郡との関係が再発見された時期として、北条久時らの頃を推定したので、少し遡って十三世紀の東金における日蓮宗の動向をみておきたい。

東上総地域ではこの時期、弁流の活動が盛んであった。その祖である乗観房日弁は、延応元年（一二三九）駿河国富士郡に生まれた。最初、駿河国の天台宗瀧泉寺で出家し、宥弁と称した。のちに日蓮に論破されたことを契機に弟子となり、日弁の名を賜った。上総における日弁の活動としては建治三年（一二七七）の長国山鷲山寺の開山が大きい。東金では正応二年（一二八九）に久時を折伏教化し、高福山上行寺を建立している。

正応二年乙丑三月僧日弁中興ノ開基タリ。是ヨリ先、鎌倉時世ノ真言古刹ニシテ、古賀城主ノ香花院タリ。当時ノ北条氏ノ遺物寺什ニ現在スト云フ。

『上総国誌』卷之六

開祖日弁ハ聖祖（日蓮）ノ命ヲ蒙リ、建治二年（一二七六）中、南総鷲巢大本山鷲山寺の創立後、一笠孤杖、常奥羽ノ三州ヲ弘通ノ途次、松之郷久我台ノ城主北条武蔵守平久時ヲ折伏教化シ、其ノ菩提寺ナルヲ改宗セシメ、弘通道場トシ、足ヲ止メ四近ヲ教化シ、帰依スル者四方ニ相亜グ。其ノ後、永仁三年（一二九五）地ヲト（ぼく）シテ、願成就寺ノ堂宇ヲ鵜ヶ峯北方高邱ニ創立シテ、現時ニ臻ル。実ニ四十有余代、其ノ布教帰依スル者日二月ニ旺盛ノ因ヲナシ、北条氏ノ信仰愈々厚ク、長子守時公ニ臻リ、更ニ堂宇伽藍ヲ建設シ、法鼓四境ニ轟キ、宗風四近ニ洽ク、其ノ旺盛ハ筆紙ニ尽シガタシ。

正安元年（一二九九）春、久時公薨去シ、高福院殿ト法称シ奉ル、之レ即チ当山開基ノ因ニシテ、高福山上行寺ト命名セル所以也。
（上行寺「当山由緒書」大正九年（一九二〇）九月）³⁹

日弁はこの後、延慶元年（一三〇八）に上洛し、青柳山本門寺を開いて布教の本拠地とした。それに関して、日弁が定家末孫で禅僧であった蓮秀を折伏して弟子とし、蓮秀改め日寿が二条西洞院定家旧宅を提供して創建されたのが本門寺であるとする説がある⁴⁰。日

寿は本門寺二世である。

日寿の経歴は定かではなく、現在知られている定家宅趾にはそのような説はみあたらない。また、日親『伝灯証』には「日弁ハ上総鷲栖ノ開山也、京都ノ青柳厨子ハ鷲栖ノ門徒也」⁴¹とするだけで、日寿の名は見えない。

一方、日寿は東金にいくつかの足跡を残している。まず、東金市大沼田の法輪山妙経寺の建立である。

東金市大沼田字上之原四五七番地にあつて、法華宗本門派に属し、茂原市鷲山寺の末寺である。

寺伝によれば、後醍醐天皇の御宇、正中二年（一二三二）蓮秀日寿の開基と伝えられている。日寿は日蓮門下の四長老の一人、日弁（鷲山寺・上行寺の開基）の高弟で、常に師と行動を共にして、上総・常陸・奥羽方面に日蓮宗を布教し、各地に寺院を創建し、師日弁の死後、その遺命を奉じて、この地に至つて妙経寺を創建、嘉暦元年（一二三六）九月一七日入寂した⁴²。

また、一之袋の水神社を勧請したとされている。時期については、弘化四年（一八四七）九月五日に名主が妙経寺に提出した覚書に「当村鎮守水神宮来由ハ始メ弘安元年（一二七八）戊寅正月二〇日、大沼田村妙経寺開山蓮秀日寿上人御勧請ナリ。」（『東金市史 五 総集篇』五二六頁）とあるが、妙経寺の創建と時期が隔たっているため、『東金市史』では妙経寺と同じ頃の勧請か、としている。確か

に、弘安元年（一二七八）は、師の日弁も東金に入る前か入つて間もない頃であるし、日弁上洛後に日寿が改宗して弟子となつたという説に沿うならば、弘安期の勧請はありえない。

日寿の素姓や活動については材料不足といわざるをえないが、定家末孫というのがたとえ謬説だとしても、日寿が何らかに和歌の世界と縁のある人物であつたことを示しているのではないか。十四世紀の東金と古今集古注釈の世界との接点を考えるうえで視野に入れておきたい。

六．おわりに

本稿では、『上総国誌』に記された黒川氏の「古記」に自性論灌頂と同系統の説が伝わっていたらしいことを受けて、現地資料をもとにその周辺を検討してみた。その結果、日什・日弁およびその弟子ら日蓮宗僧の動向を視野に入れる必要があると考える⁴³。法光寺の前身が真言宗であつたと言われながら、佐倉からきた天台僧が法光寺にあつた像を持ち去ってしまったなどと伝わっているのも、このあたりに勢力をはつた日什や日弁が天台宗出身であつたことが関係しているかと思われる。

ただし、「古記」の「永徳二年」の款の信憑性が最大の問題である。もし信じられるならば、人丸赤人一人二名説そのものが十四世紀に遡れる。しかし、日什と法光寺およびその周辺との関わりを示す資料が主に近世のものであるため、日什を改めて法光寺の開山に

位置づけた人々、田中村の黒川氏の後付けである可能性もある。

同じく東金に残る歌人の伝説、小野小町と西行については今後の課題とする。丘山台にはかつて「小町塚」があり、小野小町が機織りに使った道具を埋めたとする説が伝わる。また、山田の貴船神社脇には、西行が植えたと言われる墨染桜がある。西行は、文治二年（一一八六）、東大寺再建のための勧進の旅のおり、この地に立ち寄って赤人・小町をしのびつつ、負神（貴船大明神）を安置した。そして、杖としていた山城国紀伊郡深草の墨染桜の枝を傍に挿して「深草の野辺の桜木心あらば亦この里にすみぞめに咲け」と詠じて去った。この杖が根付いて今に至るといふ⁴⁴。この歌自体は、上野岑雄「ふかくさののべの桜し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ」『古今集』巻一六・哀傷 八三二の第四句を改変したものであるし、地面に挿した杖が根付いて樹木となるといった伝承は、人物や物を変えて全国に語られており、一つの伝承の型である。房総では頼朝を主人公とするものが複数ある。到底実話とはいえず、事実から派生した話とも思えない。

これらについては全く検討が及んでいないのだが、岑雄の歌ゆかりの京伏見の墨染桜寺、元貞観寺のことに触れておく。岑雄が藤原基経の死を悼んで先の和歌を詠んだところ、貞観寺の桜が墨染色に咲いたという。豊臣秀吉の命によって岑雄の和歌を書いた細川幽斎の短冊があったが、この名刹を増長院日秀上人にその跡地を寄進して再興し、身延山末寺としたという（『新編法華霊場記』六）⁴⁵。あるいは、東金の西行墨染め桜伝説も日蓮宗僧の関与があったかもしれない。

れないと想像されるのである。

【注】

¹ 「為頭流の古今集古注釈および秘伝における赤人上総国山辺郡出身説に関する考察——その成立をめぐって——」『城西国際大学大学院紀要』二三、二〇二〇年 一〇三三頁。人麿・赤人同一人物説について先行研究の遺漏があったので、記しておく。片桐洋一は、『玉伝深秘卷』二系統と冷泉家時雨亭文庫蔵「私所持和歌草子目録」（鎌倉後期書写）を通して、自性論が独立した秘伝であったと推察している（『柿本人麿異聞』和泉書院 二〇〇三年 七〇三頁）。

² 「柳」の字はやや不鮮明。人名は、牧冬映を称した俳人の初代「冬英」（一二二一〜一七八三）、二代目「兌堂」（生没年不明）、三代「方堂」（一七六〇〜一八四九）である（生没年は、ジャパンレヅジ版『日本人名大辞典』講談社による）。

³ 『東金市史 五 総集篇』東金市 一九八七年 八二九頁。『東金市史』は、史料原文活字化の際、和暦に西暦を書き添える処置を行っている。便宜上、本稿でもそのまま引用している。

⁴ 『東金市史 五 総集篇』五九二頁。

⁵ 安川惟礼、号柳溪の著。明治十二年（一八七九）刊。先行の地誌を多く取り入れつつ、筆者自身が現地取材した内容をまとめているが、誤謬も多いとされる。本文は、国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndjp:pid/763710>）等によって確認できる。紀元二

千六百年記念房総叢書刊行会編『紀元二千六百年記念房総叢書 第七卷』紀元二千六百年記念房総叢書刊行会 一九四二年、改訂房総叢書刊行会編『改訂房総叢書 第四輯』改訂房総叢書刊行会 一九五九年に収録されている。

6 『紀元二千六百年記念房総叢書 第七卷』も「長享元年」としている。

7 小川力也「上総七里法華の形成」千葉県郷土史研究連絡協議会編『日蓮房総における宗派と文化』千秋社、一九八〇年 一一一～一二六頁。同「上総七里法華」『房総の郷土史』三、一九七五年 五〇～六二頁。

8 『東金市史 三 史料篇三』所収 一二三頁。

9 少し先走ると、『玉伝深秘』所収の赤人縁起は、上総国山辺郡不幸井の観音堂に現じた老翁のことから語るが、龍に助けられた両親のもとに生まれた兄弟が珍玉・相玉と名付けられ、龍神の求めに応じて相玉が差し出されたこと、またこの両名が実は人丸・赤人である、としているのが想起される。

10 「諸大本山歴世表」稲田海素編『日蓮宗年表』立正大学日蓮宗史料編纂会 一九四一年による。

11 ジャパンナレッジ版『日本歴史地名大系 千葉県の地名』（平凡社）の茂原市渋谷村に「字西谷の願本法華宗行光寺は大永年中（一五二一～二八）創建、日行開基の寺伝をもつ」（<https://japanknowledge.com/psnl/display/?kw=%E8%A1%8C%E5%85%89%E5%AF%BA&id=30020120000295100>）とある。日行の創建としては、市原市草刈の法音山行光寺のほうがよく知られている。同寺は、大永二年二月創建とされ、日泰開基の浜野本行寺の末寺から京都妙満寺の末寺となっている。日行は本行寺

二世である。同じく本行寺の末寺、市原八幡の泰廣山圓頓寺の縁起（市原郡教育会編『市原郡誌』名著出版 一九七二年）によれば、日行は、市原市八幡村の飯香岡八幡宮の神官であった市川刑部の子で、延徳（一四八九～九二）の頃、重篤な病にかかった際、日泰の祈願によって平癒したこと、父刑部が寄進したものという。

12 『東金市史 五 総集篇』五九四頁。この資料では「西法寺」の名は第二項に見えるが、「嘉平太屋舗、元真言宗西法寺」とあって、法光寺の前身とはされていない。

13 明細帳と開基の考証は、『東金市史 五 総集篇』六〇〇～六〇二頁。

14 『大網白里町史』第一部 第二章 第八節 二 酒井氏と七里法華」にも「（一）東上総における日泰とその門下の活動は文明三年（一四七二）ころにもとめられる。（二）創建、改宗は長享二年（一四八八）だけではなく、約一〇〇年の間におこなわれたとみることができ酒井氏の領国の拡大とも関連している。改宗にあたって破壊をともなった伝えをもっているのはここでは法光寺のみである。」とされている（二二六～二四五頁）。

15 『上総国誌』は、『房総史料』「山辺赤人は上総国山辺郡の人也。彼地にさぐりとして、長さ一尺ばかりとて、長さ一尺ばかりなるが栗のなる。古今榮雅抄にみえたり」（『改訂房総叢書 第四輯』四七頁）に言及していない。この記事の意義については別途考えたい。

16 『改訂房総叢書 第四輯』三六六頁。

17 三輪『歌学秘伝の研究』風間書房 一九九四年 四八七頁、四九三頁。『柿本人麿之事』は延宝八年（一六八〇）一楽軒榮治の書写。「柿本人麿

呂之事」と「柿本人麻呂之大事 歌道ノ正受」から成り、後者の末尾に写本の奥書として文永七年（一二七〇）、為頭入道明覚と記されているという。

18 片桐洋一『中世古今集注釈書解題四』赤尾照文堂 一九八四年 一四〇
四九頁。片桐によれば、『古今榮雅抄』は、永祿四年（一五六二）、飛鳥井雅親（法名榮雅）の息雅俊の説を中心にして、飛鳥井家の高弟速水親祐の伝授を受けた玉信がまとめたものと考えられている。山辺郡に赤人の廟ありとの情報は、現地を訪れた人によるものであり、遅くとも十六世紀までに廟が作られていたか。

19 延宝二年（一六七四）版本の諸書による。国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースにより宮内庁書陵部 書陵部蔵マイクロデジタル変換 二二三・七七 五五コマなどを確認。

20 日什の伝は、窪田哲城『増補 日什と弟子達―什門殉教史』山喜房佛書林、二〇〇三年 「第二章 日什正師伝」などを参照。その事蹟は、窪田監修『頭本法華宗史料 一 妙満寺日什上人伝集成』同『頭本法華宗史料 二 妙満寺日什上人伝集成』法華ジャーナル 一九八三年、日蓮宗宗学全書刊行会編『日蓮宗宗学全書 頭本法華部第一』日蓮宗宗学全書刊行会 一九二二年 に収録に収録された諸書、特に『日什上人自伝』『日什御奏聞記録』（日穆記）、『門徒古事』（日運記）などから知られる。

21 『日蓮宗宗学全書 頭本法華宗部 第一』五一頁。

22 『頭本法華宗史料 一』四九頁。

23 『頭本法華宗史料 一』五七頁。

24 『新編国歌大観』CD-ROM版。

25 東京大学史料編纂所編纂『大日本史料 四編之二』東京大学出版会 一九八一年 七九七頁の引用部分を参照。

26 千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史 資料編中世4（県外文書1）』千葉県 二〇〇三年 二六二頁。

27 東金市 一九九三年 九八六―一〇七八頁。

28 大網白里町史編さん委員会編 大網白里町 一九八六年 二二六―二四五頁。

29 滝川恒昭「房総酒井氏に関する基礎的考察―酒井清伝の検討を中心に―」佐藤博信編『中世房総と東国社会 中世東国論…四』岩田書院 二〇一二年。

30 『中世歌壇史の研究 室町後期 改定新版』明治書院 一九八七年 一〇二頁。

31 『千葉県の歴史 資料編県外』ぎょうせい 四頁。八五四 浄光明寺文書六。

32 「絵図の成立時期は、元弘三年から建武二年までの二年間と考えられる」（文化遺産データベース <https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/213919>）

33 『千学集抄』の「上総介家系」に「常清御子胤親 上総国角田と号す」（『戦国遺文』房総編 補遺、八十五頁）とある。角田は、スミダ、スダ、カクタとも。

34 「押田」氏の項で千葉一族―千葉一族【お】Ⅱ <http://chiba-sinet.chizoku32.htm> 東上総地域には、「押田」の地名が二箇所存在する。現在の茂原市押田

35 と夷隅郡岬村押田である。『上総国村高帳』の文禄三年（一五九四）に

押日村とみえ、中世まで遡れる。

36 『戦国遺文 房総編 第四卷』東京堂出版 二七四～二七五頁。

37 勉誠出版 二〇〇七年 一四六頁。

38 『古今集注釈書伝本書目』四四一頁。

39 『東金市史 五 総集篇』五七一頁。

40 本門寺は移転を重ね、現在は上京区下堅町の宥清寺となっている。

41 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学全書 史伝旧記部』山喜房仏書林、一九六九年 六〇頁。

42 『東金市史 五 総集篇』六〇六頁。

43 糸久宝賢「京都日蓮教団と三条西実隆―交渉の接点を中心として―」
『印度学仏教学研究』五九号、一九八一年）では、両者の和歌を媒介とした交わりについて論じている。

44 『東金市史 五 総集篇』第二篇 貴船神社（山田）、同 第六篇 文化財・金石文 A 文化財 四 天然記念物 墨染桜、同 第七篇 民話・伝説 B 伝説『伝説』墨染（すみぞめ）桜。

45 享保三年（一六八八）刊。『古事類苑』宗教部五〇 仏教 貞観寺 九七五頁参照。

The Background of the Legend of Akahito in the Yamabe district, Kazusa Province: From the Perspective of Local History and Field Materials

Miyako Okada

Abstract

This paper uses local history and materials to examine the background of the theory that, according to the ancient annotations of the *Kokin-shu*, the poet Yamabe no Akahito was born in the Yamabe district of the Kazusa province.

Ryukei Yasukawa's *Kazusa Kokushi* describes the history of Akahito's burial mound and the Hokoji Temple in Tanaka-mura. He discusses the ancient records of "a certain Kurokawa" whose ancestor is said to have lived in Aizu under the name of Tanaka Gyoubu during the Eiroku era (1558-1570), and who was later restored to the Kurokawa family. One of the Kurokawas ancient records describes The theory that Akahito is the same person as Hitomaru. It also includes a note about the creation of the document in the year Eitoku 2 (1382). This can be said to be similar to the "Jisho-ron" found in the ancient commentaries of Tameakira-ryu on the *Kokin-shu*. Therefore, this paper focused on Nichiju (1314-1392) and examined the origins of the Kurokawas to discuss the birth of the Akahito Legend. According to early modern documents, Nichiju was from Kurokawa of Aizu and was regarded as the founder of Hokoji Temple and the Honpukuji Temple in the neighboring village. Additionally, he might have composed tanka poems. In Kyoto, Nichiju conveyed his doctrine to Nijo Yoshimoto, whose achievements in tanka poetry are considered significant.

This paper considers the movements of the Nichiren-shu in the Yamabe district and its surrounding areas from the 13th century onward and discusses the birth of the Akahito Legend in the ancient annotations of the "Kokin-shu and in the Yamabe district.

Key words: Hitomaru and Akahito, Yamabe district, Kazusa province, Jisho-ron, Nichiren-shu,
Kokin-shu annotations